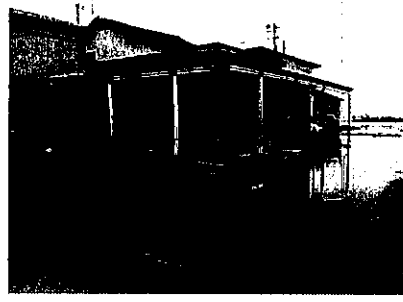
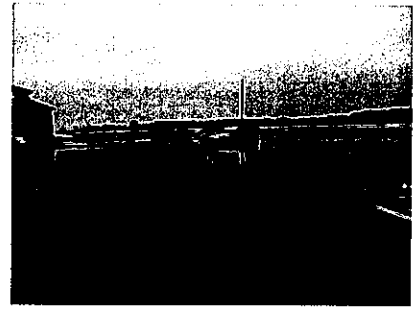




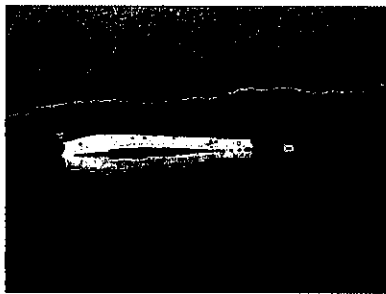
沖の潮干狩り場に家が



地盤沈下して道路が満潮で水びたし



海と道路の境が？



転覆した漁船



軽トラとコンテナが漁船に衝突



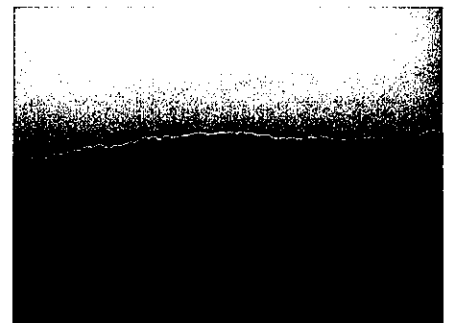
原釜・尾浜地区



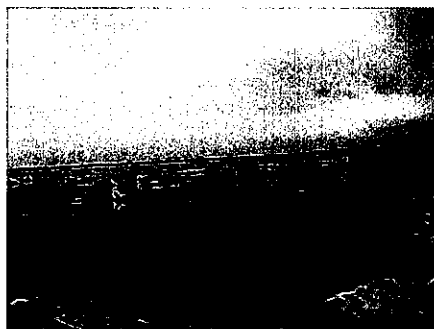
コンビナートが途中から破損



沿岸近くの寸断された道路



沿岸近くの様子



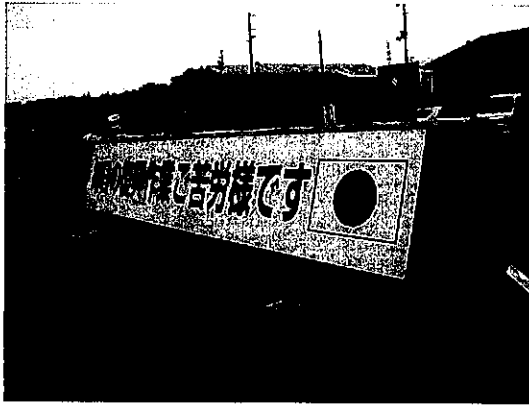
県立自然公園松川浦



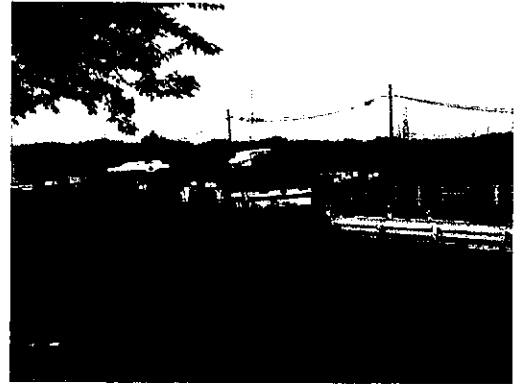
大洲海岸から流れ着いた松の瓦礫



体育館の側壁が



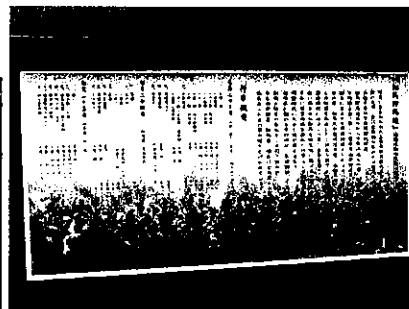
福島原発、立ち入り制限区域前のドライブインの
駐車場にあった看板



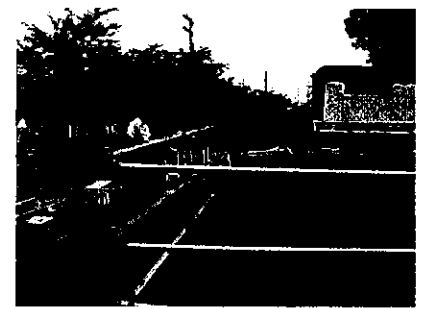
福島原発、立ち入り制限区域前の国道
6号線の検問所



相馬といえば「相馬野馬追」
今年も行なわれた馬場



「相馬野馬追」の行事概要看板



中村神社前にいた被災馬
サンライズが野馬追に参加
(川島麻沙美氏調教)

市の概要について

福島県相馬市は、人口37,113人。世帯数13,623（平成23年7月1日現在）面積197,67平方キロメートル、東は太平洋に面し、西は伊達市、南は飯館村と南相馬市、北は新地町と宮城県に隣接する400年らしいの城下町である。概ね平坦地と山間部とが相折半し、市街地は中央の平坦地に位置する。谷の奥まで水田がいて、全体的には米どころで農業のほとんどが水田である。淡水と海水が混ざった汽水領域の松川浦では、干潟でノリの養殖やアサリをやっている。福島県の漁業生産高の160億円うち、その半分は沿岸漁業と半分は遠洋漁業であるが、沿岸漁業の80億の内50億は相馬漁港で水揚げしている。現在重要港湾相馬港を開発拠点として、その背後に相馬中核工業団地を造成し優良企業の立地促進を図っているところである。

調査研究活動 1

震災後、NPO団体みなさんの動きと支援等などについて意見交換

NPO法人・・馬とあゆむSOMA (活動拠点 相馬中村神社)

意見交換者・・相馬家33代当主・相馬和胤氏の長男 相馬行胤氏

相馬中村神社 楠直 川島麻沙美氏

相馬行胤氏・・震災直後、まず考えたのは食べ物、水が無いどうするか、どこにも連絡が取れない状況で、行政が動く前に民間レベルで集められるものをフェイスブックで呼びかけ、期限付きで集め（携帯は不通でも、メールはOKだった）一週間で5、60tの物資が集まった。民間のやった初動としては類のないものだった。その後、「ボランティアの受け入れ、全国からの物資の受け入れや、さばける能力を誰に求めるのかを考えたとき、ここNPOの立ち位置を考え、受け入れた」。行政トップの市長もぶれずに協力し、牽引してくれたことはすごかった。全国からの救援物資の保管場所やボランティアの拠点を相馬中村神社に置き、初めて会った友達の友達である寝食を共にした仲間、SOSライフセーバーのみなさんの助けをかり、99パーセントは捌けた。行政は100集まるまで10集まっても配らないが、我々は10でも集まれば少量でも配る。ここに大きな差がある。早い段階で浜田市を初め多くの自治体が救援物資を送ってくれたこと、100日に亘って毎日パンを1,800個作ってくれた広島のパン屋さん、多くの人たちが協力しかかわってくれた事に感謝しますとのことでした。何ができるか、自分達の立ち位置を考えスピードある行動力は、旧相馬藩の有事に備える気風がでていていると感じた。

川島麻沙美氏・・馬をはじめ動物達の対応をもっと早くしたかった。今も続いているストレスがある。同じように子ども達も不安やストレスがある。心のケアが大事になってくる。

相馬行胤氏・・有事がある時は強きリーダーシップ必要、どんなときでも守ってくれる人を選ぶことができるのは、選挙であり有権者の人たちである。今、一度選挙の大事さを考えるべきだと指摘。今後の支援は、それが何であれ忘れないで継続した支援をしていくことが大事であり、同士の結束力をたかめるタウンミーティング等が必要と述べた。

(NPOの活動を相馬行胤氏より伺う、中央)



(相馬中村神社社務所前、女性は川島麻沙美氏)



調査研究活動 2

災害復旧の状況と今後の支援の在り方について

相馬市長・相馬は400年の歴史の城下町である。伊達藩と相馬藩の歴史的な対立から、伊達藩に備える軍事訓練である相馬野馬追が生まれ、有事（震災等）に備えて構えてこの気風は、生きてこの今回の震災にたいして市民は凄然としていたという。

震災の罹災者は約5,000人であり犠牲者は450人、9割は助かった。死亡した人たちは津波で溺れ、溺死が多いただろうと思っていたが、ほとんどの人たちが津波の衝撃、水圧によって圧迫死されたことを聞いた。

市長の説明において、震災直後の災害対策の基本は「次の死者を出さない」生存者救出、そして人間生きるためには、まず水が必要であり次が食料である。そして避難者の状況把握における住民基本台帳との突合であり、地方自治の原点は戸籍の番人である認識に立って行われるべきであると言われた。

市の地域再生に向けて最初に考えなければいけないことは、震災直後から48時間位で決まっていた。（直後の対応、担当課の割り当て、地域再生の取り組み等）

色々な方面から支援を頂いたが、いち早く救援物資を送ってくれたのは、日頃の付き合いのある友人の市長たちであり、いかに交友が大事であるか改めてわかった。

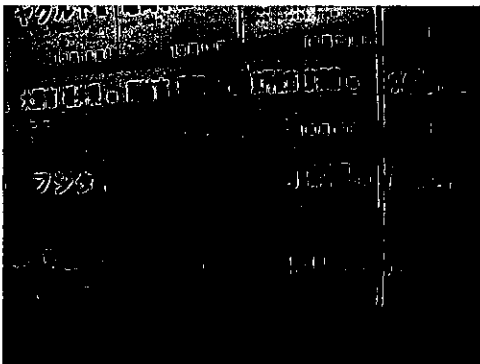
相馬市長の被害状況や災害対策などの説明はわかり易く、時には力強く私たちに説明をされる姿は行政のトップたる堂々としたものである。

相馬藩の末裔であり、次世代の当主であるNPOの相馬行胤氏は、有事の時は行政に強きリーダーシップが必要であり、正にそのリーダーが相馬市長であると云っている。

いつどこで有事がおきても不思議ではないから、震災を教訓として自分達の立ち位置をよく考え、瞬時に行動に移すことができるよう、日頃の心構えや、備えがいかに大事かを教わった。

立谷秀清市長をはじめ 波多野広文市議会議長 NPOの相馬行胤氏、川島麻沙美氏 宿泊した岬荘のおかみさんなど、復旧・復興の忙しい中、私たちの行政視察を快く受け入れていただき、感謝する次第である。今後この経験を生かし明日の浜田の為に、尽くす事をお誓いするものである。

(浜田市救援物資の告知)



(波多野議長と)



(立谷市長と)

